国際学部　准教授　出羽 尚（いずは たかし）

国際学科

分　野　西洋美術史

研究テーマ
・イギリス風景画の研究
・18－19世紀の挿絵版画の研究
・エンブレムの研究

キーワード　イギリス美術、挿絵版画、エンブレム

所属学会等　美術史学会、美学会、イギリスロマン派学会

特 記 事 項

URL:
Mail: izuha[at]cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: 028-649-5221
FAX: n/a

研究概要

イギリス美術史、特にターナーを中心とした18-19世紀の風景画研究。美術史の基礎である様式分析を核にしつつ、作品制作に近接する美学、文学、産業、社会といった問題との関連も視座に研究を進めている。

教育・研究活動の紹介（特徴と強み等）

文化・美術を研究する際の基本的な方法論を身に着けることを目標とし、そのために必要な資料収集整理、文献調査、フィールド・ワーク等の実践を重視した教育を行っている。

今後の展望

将来的には、学生の研究活動を、地域社会の貢献に役立てる可能性についても考えたい。

社会貢献等（社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等）

学部付属の多文化公共圏センターの事業を通じた地域貢献活動のほか、高校での出前講座を実施している。

国際学部　准教授　鎌田（かまだ） 美千子（みちこ）

国際学科　鎌田研究室

分　野　応用言語学，日本語教育学，言語習得論

研究テーマ
・言語教育におけるパラフレーズに関する研究
・日本語を第二言語とする子どもたちへの日本語習得支援の方法論的検討
・日本語教員養成に関する教育実践研究

キーワード
日本語教授法
留学生への日本語教育
学齢期の子どもへの日本語教育

所属学会等　日本語教育学会，異文化間教育学会，専門日本語教育学会　他

特 記 事 項　特になし

URL:
Mail: kamada[at]cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: -
FAX: -

研究概要

【言語教育におけるパラフレーズに関する研究】

第二言語としての日本語の教育方法を「パラフレーズ」に着目して研究しています。パラフレーズとは，言い換えのことを指します。普段はあまり意識していないかもしれませんが，例えば，講義で聞いた内容をレポートに書く場合には，話しことばから書きことばへのパラフレーズが生じます。逆に，文献に書かれている内容について口頭で述べる場合には，書きことばから話しことばへのパラフレーズが生じます。世界の言語から日本語を眺めてみると，日本語は，話しことばと書きことばの差異が大きい言語の一つとされ，その使い分けは，外国語・第二言語として日本語を学ぶ際に課題の一つとなります。私たちは，他にも伝達目的や場面，読み手・聞き手，ジャンルによる違い等，状況に応じて言語表現を使い分けており，同じ意味内容を示す場合であっても言語表現は実に多様です。このような側面に着目して，第二言語としての日本語の教育方法を具体的に検討しています。

【日本語を第二言語とする子どもたちへの日本語習得支援の方法論的検討】

上述したパラフレーズの観点は，日本語を第二言語とする子どもたちの日本語習得支援においても重要です。日本語を第二言語とする子どもたちは，まず話しことばを中心に覚えるため，教科書の文章を読むのが難しい時期があります。文章理解に関する諸研究では，単語がわかるようになるだけでは内容理解に結びつかないことが示されており，そうした知見をもとに，いかに話しことばから書きことばへの移行を支えていくかを研究室の学生たちと共に考え、取り組んでいます。

教育・研究活動の紹介 （特徴と強み等）

言語教育法、学習理論の知見に基づき，大学での教育と研究を展開しています。留学生を対象に開発した日本語学習用テキスト『アカデミック・ライティングのためのパラフレーズ演習』（スリーエーネットワーク）は，国際交流基金のウェブサイトでも紹介され，国内外の大学や日本語教育機関で広く活用されています。本書については，母語教育の必要性の観点から『学校英語教育は何のため？』（ひつじ書房）においても取り上げられました。

現在は，日本語教授法の開発を発展的に進め，理論と実践の両面から概説した専門書の刊行を目指しています。授業開発においては2017年に第９回日本語教育方法研究会優秀賞を受賞しました。

今後の展望

日本語教育を学ぶ学生たちの進路を見ると，日本語学校のほか，小中高等学校，教育・報道・製造関連の企業，大学院進学等，幅広く多様です。小中高等学校の教員になった場合には，児童生徒への教育を言語と教科の両面から考えられるようにならなければなりません。企業に就職した場合には，外国人従業員への研修を担うことが少なくなく，多文化共生の面からも活躍が期待されています。今後も学生一人ひとりの学びを支える教育と研究を展開していきたいと考えています。

社会貢献等 （社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等）

国立大学日本語教育研究協議会 理事，大学日本語教員養成課程研究協議会 理事　他

2017年5月更新

国際学部　教授　柄木田 康之（からきた やすゆき）

国際学科　柄木田研究室

分　野　文化人類学

研究テーマ
・ミクロネシア地域社会のグローバル化
・途上国葬送の医療化・貨幣経済化
・贈与交換の貨幣化

キーワード　・文化人類学、通過儀礼の貨幣経済化

所属学会等　・日本文化人類学会、日本オセアニア学会、日本民俗学会

特 記 事 項

URL:
Mail: karakita[at]cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: 028-649-5205
FAX: 028-649-5206

研究概要

グローバルな貨幣経済下の周辺住民の自立戦略を、文化人類学の定点長期研究によって明らかにしている。ミクロネシア連邦ヤップ州離島出身者の民族意識の覚醒を、貨幣経済と政府サービスの州都への集中に対する対抗運動として捉えられる。ただしヤップ本島と離島の伝統的パートナー関係は二元的な対立となってしまったわけではない。肥大化した公共部門の貨幣経済のもと、現金を必要として離島カテゴリーが生成・強化されると同時に、互酬交換に基づく伝統パートナーとの関係が貨幣経済化の脈絡で選択・流用されているからである。

教育・研究活動の紹介（特徴と強み等）

文化人類学の立場から第三世界の社会文化変容に関連する諸問題を検討します。授業では植民地主義、ジェンダー、エスニシティ、地域共同体と世界システムの接合等の今日的テーマを選択し、各自文献・フィールド調査を行い、問題意識を発展させることを目標としています。レポート執筆までの過程で、テーマの選択、大学・公共図書館の利用、文献リストの作成、研究ノートの作成、配布資料・発表スライドの作成、口頭発表、議論、レポートの執筆を経験します。また文献研究を超えてフィールドワークにもとづく研究を歓迎します。

今後の展望

現代日本社会の通過儀礼や贈答における衣類・布製品の利用拡大の意義に関心をあります。具体的なフィールドワークに結び付けたいと思っています。

また日本における外国人移民の祭礼・儀礼の輸入とイベント化にも関心があります。

社会貢献等（社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等）

学会役員、放送大学対面授業、教員免許更新講習講師等

国際学部　准教授　阪本（さかもと） 公美子（くみこ）

国際学科

分　野　アフリカ研究、発展論

研究テーマ
・タンザニアにおける社会開発と文化、内発的発展
・タンザニアにおける母子保健とジェンダー
（女性世帯主世帯、男女分業）
・タンザニアにおける薬用・食用植物に関する在来知の地域還元

キーワード
・タンザニア、社会開発と文化、女性と子ども
・在来資源・在来知の地域還元、音楽

所属学会等
・日本アフリカ学会　国際開発学会

特 記 事 項
・地域の資源や知識を搾取するのではなく、地域に還元できる形での連携を歓迎します。

URL: http://d.hatena.ne.jp/Sakamoto__Kumiko/20110401/1301657759
Mail: ksaka[at]cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: 028-649-5180
FAX: 028-649-5171

研究概要

●タンザニアにおける社会開発と文化、内発的発展
ユニセフと国連開発計画のタンザニア事務所に勤務した経験の中で、国際機関が各国の政策を影響しすすめる「社会開発」は、必ずしもコミュニティレベルで共有できているものではないことを実感しました。社会開発と地域文化はどのようにかかわっているのか、内発的発展の実現方法など、「開発」が「遅れている」と認識されている地域に焦点を当て、博士論文でテーマとし、今も関心を持ち続けています。

●タンザニアにおける母子保健とジェンダー（母系的社会、女性世帯主世帯、男女分業）
女性と子どもの健康、母系的社会、女性の中でもシングルで家計を切り盛りしている女性世帯主世帯、そして男女分業について、研究してきました。

教育・研究活動の紹介 （特徴と強み等）

●国際機関での実務経験、タンザニア農村での調査経験、社会の構造的理解が、教育・研究活動の特徴と強みです。

●基盤教育では、「アフリカ学入門」、専門科目では「アフリカ論」や「途上国経済発展論」を担当しています。とくに「アフリカ学入門」では、アフリカの女性の労働体験（籾摺りや水くみ）、タンザニアの村民になりきって演技するロール・プレー、アフリカ関連イベントの参加、アフリカからの留学生やアフリカを体験した先輩との交流など、アクティブ・ラーニングを重視しています。

●研究は、タンザニアの中でも比較的発展が「遅れている」と認識されている地域の「豊かさ」（相互扶助、祭りや芸能、地域資源・在来知）に焦点を当て、新たな価値観に基づく社会のあり方や、内発的発展を模索しています。

今後の展望

●タンザニアにおける薬用・食用植物に関する在来知の地域還元
タンザニアの人々は、地元の植物資源に関する薬用・食用知識が豊富です。それらが継承され、人々の健康や栄養に還元できるよう、研究をすすめています。

社会貢献等 （社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等）

●地域の資源や知識を搾取するのではなく、地域に還元できる形での連携を歓迎します。

●例えば、タンザニア中部ドドマ州で活動してきたNGOは、地域での利用を主眼にバオバブ油、ロゼーラ、モリンガなどを開発・普及してきましたが、バオバブ油に関する研究など求められているとともに、日本でもフェアー・トレード的につながることができる可能性もあります。

●音楽芸能（太鼓と踊りと歌）グループのプロモーションへの協力など、大歓迎です。

●タンザニアの農村を舞台に、国際協力、植林、太鼓をテーマとした絵本も構想中です。

4 質の高い教育をみんなに

10 人や国の不平等をなくそう

16 平和と公正をすべての人に

国際学部　教授　佐々木（ささき） 一隆（かずたか）

国際学科　国際文化研究専攻／国際学研究専攻

分　野　英語学・言語学

研究テーマ
・言語の普遍的特性から見た英文法研究
・日英語比較を中心とした言語比較
・言語研究の成果を言語学習や翻訳に応用する研究

キーワード
英語研究
言語研究一般
英語・言語研究の普及と英語教育への応用

所属学会等
日本英語学会、日本英文學会、英語語法文法学会、
The Linguistic Society of America

特 記 事 項　英語研究・言語研究の紹介および英語教育への応用研究ができます。

URL:
Mail: sasaki[at]cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: 028-649-5208
FAX: 028-649-5208

研究概要

言語には多様性とともに普遍性が存在するという考え方に基づいて、英語の名詞句について、構造と機能、形式と意味の対応、コミュニュケーション、歴史や母語獲得などの観点から、総合的かつ動的に捉えようとする研究をしています。また、英語と日本語などを比較したり、言語研究の成果を言語学習に応用したりすることも視野に入れています。

教育・研究活動の紹介 (特徴と強み等)

言語普遍性の考えに基づいて、英語に力点を置きながら、言語の構造と機能について講義しています。英語と日本語などの比較も扱っています。演習では、英語または日本語で書かれた学術書や論文を読み、その概要を捉え、精読もしながら考察を行っています。また、卒業論文・修士論文・博士論文の指導を重視し、学術論文の英文執筆をめざした英語の授業なども担当している点に特徴があります。

今後の展望

現在は学生を中心に講義や演習を行っていますが、今後は地域への貢献をもう少し拡充したいと思います。対象は学校、自治体、民間企業などが考えられます。また、言語研究の成果を言語学習や翻訳に応用する研究にご協力いただける学校、自治体、企業がありましたらお声がけいただければ幸いです。

社会貢献等 (社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等)

これまで取り組んできた主な社会活動：宇都宮市社会教育委員（2013年～現在）、放送大学栃木学習センター非常勤講師・面接授業・専門科目「人間と文化（ことばと文化について考える）」（2017年11月予定）・共通科目「外国語（日本語から見る英語の読解と作文）」（2012年）、栃木県高等学校教育研究会国際理解教育部会等講演：「国際理解における言語活動の諸相」（2014年）。高等学校などでの出前授業、高大連携事業での高校生へのコメント、高校訪問による進路指導部との意見交換も行っています。

大学教員でないとできない活動を継続しながら、大学をもっと身近に感じてもらい、大学も地域の一部として活動できるよう今後も取り組んでいきます。

3 すべての人に健康と福祉を

5 ジェンダー平等を実現しよう

16 平和と公正をすべての人に

17 パートナーシップで目標を達成しよう

国際学部　准教授　清水（しみず） 奈名子（ななこ）

国際学科

分　野　国際関係論・国際機構論・平和研究

研究テーマ
- 国連安全保障体制における武力紛争下の一般市民の保護について
- 東電福島原発事故による栃木県の被災問題について
- 原子力エネルギー利用をめぐる国際政治について

キーワード　国連安全保障体制・人間の安全保障・原発震災の被害と人権問題

所属学会等　国際法学会・国際政治学会・日本平和学会

特 記 事 項　市民団体の勉強会等で講師を担当することが可能です

URL: http://researchmap.jp/nanakoshimizu
Mail: nshimizu[at]cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: 028-649-5170
FAX: 028-649-5170

研究概要

主に国際連合の安全保障体制について研究しています。国際関係を考察する際に、国際連合のような制度に注目して、武力紛争の際に最も犠牲となる割合の高い一般市民をどのように保護していくかについて考察してきました。

2011年の原発震災後は、人間の安全保障と原発事故被害の関係についても研究を続けています。いずれの研究課題についても共通する「問い」は、戦争や原発事故のような国家的危機に際して、なぜ政府は一般市民の保護を優先せず、被害を切り捨ててしまうのか、という問題です。「国家は国民を守らない」という問題が過去から現在にかけて続いていることを学ぶことによって、現代社会の何が問題であり、どう改善していくのか、一人ひとりの市民に何ができるのかについて、初めて考えることができると思っています。

教育・研究活動の紹介 （特徴と強み等）

「戦争と平和」に関する問題について考える授業の一環として、宇都宮市内の戦争遺跡を訪問するスタディーツアーを、市民団体の協力のもとに実施しています。また東電福島原発事故が提起した問題を、宇都宮大学にある5つの学部から教員が集まり、文系理系を越えて考える「3.11と学問の不確かさ」という授業も、2012年以降毎年続けています。これらの授業の際に、研究成果である原発事故の被災状況等を報告するシンポジウムや勉強会を開催し、一般公開もしてきました。さらに戦争の被害であれ、原発事故の被害であれ、当事者の証言を読む作業を授業に取り入れています。公の歴史の中では記録されにくい被害者の声を聴きとるために必要であると考えているからです。

今後の展望

原発震災から時間が経過するにつれて、事故と被害の風化が進んでいます。しかし残念ながら、原発事故の終息は見通すことができず、現在も被害が続いていることを、教育と研究の両分野で今後も発信していきたいと思います。

社会貢献等 （社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等）

「安全保障関連法案（安保法制）」「集団的自衛権」「核抑止論」「テロ防止」など、安全保障に関するキーワードが、日本のニュースを騒がせる時代になっています。これらの言葉の意味は何であるのか、どのような主体がいかなる目的でこれらの言葉を使っているのか、実際に実施されてきた政策や国際的制度とどのような関係があるのかなどについて、地域の市民団体やサークル活動関係者、公民館等での勉強会や講演会の講師を務めてきました。

さらに、東電福島原発事故後に栃木県に避難していらした方々、そして栃木県北地域において放射能汚染問題に苦しんでいる被災者の方々の聞き取り調査を行い、証言集にまとめて大学の教材としているほか、メディアへの情報発信を続けています。

4 質の高い教育をみんなに

8 働きがいも経済成長も

10 人や国の不平等をなくそう

16 平和と公正をすべての人に

国際学部　准教授　スエヨシ　アナ

国際学科

分　野　ラテンアメリカ論

研究テーマ
・ラテンアメリカ及びカリブ海沿岸における長期経済成長と財政政策
・アジア太平洋諸国における高等教育政策と雇用
・ペルー・日本における日系ペルー人コミュニティ

キーワード　・ラテンアメリカ経済、高等教育と雇用、日系人社会

所属学会等　・LASA、ALADAA、EAJS、日本イスパニヤ学会

特 記 事 項　・特になし

URL:
Mail: sueyoshi[at]cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: 028-649-5175
FAX: n/a

研究概要

ラテンアメリカ及びカリブ海沿岸における長期経済成長と財政政策

ラテンアメリカ諸国の長期的経済成長の源泉としての財政政策の意義を内性的経済成長理論の枠組みでダイナミックパネルデータ分析を用いて検証するものである。

アジア太平洋諸国における高等教育政策と雇用

日本・マレーシア・メキシコにおける高等教育政策及び雇用に関する検討で、特に雇用に対する高等教育政策の影響を明確にすることである。そのため、関連する3つの領域(行政、企業、教育機関)に調査を実施することになった。

日本・ペルーにおける日系ペルー人コミュニティ

日本からペルーへ帰国した子供たちは、日本での生活と母国ペルーでの生活を経済的な面や道徳的な面を比較しながら、生活している。ペルーへ帰国した子供たちの母国での様子を、両国での生活に対するかれらの評価や意見などを比較しながら検討している。

教育・研究活動の紹介 (特徴と強み等)

様々な意味で多様性（学際的・地理的）を参考にしながら、外国の大学の教員と連携し研究を行っている。

今後の展望

ペルーのランバイエケ州における1899年から第二次大戦前まで日系人史について資料収集し、かれらの大農園の労働者・自営業者としての活躍を検討し、経済的な面でのペルー社会への影響を明らかにする。

社会貢献等 (社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等)

日本では、「ラテンアメリカは遠いところ」という印象が持たれる傾向があります。私は、一般の方にもラテンアメリカ世界を幅広く紹介し、日本とラテンアメリカ及びカリブ海沿岸諸国との距離を縮めていきたいと考えています。具体的には、長い歴史を持つ日本人移民とかれらの子孫は、日本・ペルー両国をつないでいますので、日本における日系人社会のことをペルーへ伝え、逆に、ペルーにおける日系人社会のことを日本へ伝える活動などを推進していきたいと思います。

国際学部　教授　戚（チー）　傑（ジェ）

国際学科

分　野　教育社会学　外国語教育

研究テーマ
・多文化主義・多文化教育に関する研究
・学校教育・教師教育に関する研究
・言語教育に関する研究

キーワード
グローバリゼーション
多文化教育・言語教育
クリティカル・シンキング

所属学会等
American Education Association（アメリカ教育学会）
日本教育社会学会

特 記 事 項

URL: www.utsunomiya-u.ac.jp/scholarlist/installation/dep4/chi_je.php　TEL: 028-649-5237
Mail: jqi[at]cc.utsunomiya-u.ac.jp　FAX: 028-649-5237

研究概要

ポスト構造主義・ポスト植民主義の観点から学校教育・言語教育に関する研究・分析を行っています。具体的には、社会と教育がどのようにして人間を形成し、社会の中で、特に教育を通して形成された人間の価値基準が再び社会や教育に作用するプロセスについて論理と実証の両面から検証を試みています。その一環として近年、グローバリゼーションと多文化教育の在り方に関する研究も行っています。

教育・研究活動の紹介（特徴と強み等）

【教育活動】

教育活動において常に、学生の論理的思考力と創造性を引き出すことを重視して、思考・研究能力を養う訓練に力点を置いた教育実践を行っております。固定観念を持たずに、積極的に問題提起することを学生に促し、提起した問題については徹底した論理的思考と実践的探求をあきらめることなく続けられるように繰り返し訓練することに心掛けています。また、異なる文化をもつ人々とコミュニケーションをとる際に必要な能力と態度を養うことも重要な教育目標と考えて授業、研究指導等を行っています。さらに、調査方法など研究の方法論に関する指導や論文作成の技法に関する指導も行います。

【研究活動】

多文化教育、言語教育、学校教育やグローバリゼーションを中心に国内外の学者との共同研究を行っています。現在取り組んでいる研究課題の一つは、ポスト・コロニアルイズム理論に基づいた、人の移動とグローバリゼーションに関する研究です。ポスト・コロニアルイズムの研究では、文化の独自性と各文化圏の歴史的特殊性に注目して、経済が急速にグローバル化している今日の人の移動と旧植民地からヨーロッパ諸国への移住との相違点の解明に努めて研究を進めております。また、多文化社会に関する研究の一環として、多くの移民が流入している先進国という「メトロポリス」における自己と他者をカテゴリー化する仕組みとその変遷に関する考察を続けております。

今後の展望

グローバル化・ボーダレス化が進む今日において、異なる民族や文化背景を持つ人々が共に暮らす社会のあり方と、その実現を確固たるものにするための教育のあり方を探求することがますます必要となって来ていると思います。多文化主義、多文化共生、国際比較教育や外国人児童生徒教育などのテーマについて引き続き関心を持って取り組んでいきたいと思います。

社会貢献等（社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等）

日本の社会、教育について、積極的に海外に発信すると同時に、海外の研究手法・教育実践を日本に紹介することにも心掛けていきたいと思います。また、講演、市民公開講座や高校での出前講座も実施しています。大学の社会的責任を十分自覚して社会や地域に貢献できるよう今後も活動していきます。

国際学部　助教　藤井 広重（ふじい ひろしげ）

国際学科　藤井研究室

分　野　国際関係法、国際人権論、平和構築論

研究テーマ
・国際的な刑事裁判所（国際刑事裁判所、ハイブリッド刑事法廷）
・アフリカにおける平和構築と法の支配
・戦術レベルにおける国連平和維持活動（PKO）の課題と展望

キーワード　・国際人権/刑事法　・アフリカ、紛争、平和構築

所属学会等
・国際人権法学会　・人間の安全保障学会　・日本国際政治学会
・日本平和学会　・アフリカ学会　・日本国際連合学会

特 記 事 項　・国際機関、市民団体、政府機関等での実務経験を生かし、理論と実務の架橋となるようなアプローチを試みています。

URL: https://researchmap.jp/fujiih/　TEL: -
Mail: fujiih [at] cc.utsunomiya-u.ac.jp　FAX: -

研究概要

アフリカと法をテーマとした研究に取り組んでいます。とりわけ、アフリカにおける紛争後の平和構築において、国際刑事裁判所などの国際的な裁判所の活動や期待されている“役割”が、現地社会や国連平和維持活動（PKO）などの他の国際的なアクターに対し、如何なる影響を与えているのかについて理論と現地調査の結果も踏まえた事例研究を中心に行っています。

教育・研究活動の紹介（特徴と強み等）

国際的なルールが形成され発展してきた背景を捉えることで、現在の社会が抱える課題に対し、私たちはどう向き合うべきか議論、考察します。そのうえで、自らの実務経験も振り返りながら、現実的な課題を解決するために「何が」「如何に」求められているのか、具体的な事例を参照しながら実践的なアプローチも重視しています。講義では、インタラクティブな講義を通し、学生の発信力の育成にも力を入れています。

また、学生サークル宇都宮国際平和と司法研究会（UIPJ）の顧問も務めています。　URL：https://profile.ameba.jp/ameba/uipj

内閣府勤務時には、国際刑事司法の専門家としてマリ平和維持学校へ

今後の展望

生まれは滋賀県の長浜です。子ども頃は「国際」とは無縁でした。だからこそ、まだまだ国際社会を身近に感じづらい学生の気持ちも少しわかるような気がしています。限られた経験かもしれませんが、私がこれまでに国際社会で働いて感じたことを学生に伝え、自らのキャリアを考えるきっかけにしていただきたいと考えています。そして、宇都宮から国際平和について一緒に考えることができる仲間を増やし、より良い社会を目指した議論を積み重ねることで社会に還元、貢献していきたいです。

社会貢献等（社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等）

紛争はどうして起こるのか、私たちは非日常的なこれらの現象をどう捉えたら良いのか、現場での経験と学術的に重要なことを組み合わせた講演をこれまでに行ってきました。

講演等の実績
・早稲田大学本庄高等学院 「アフリカの多様性から考えるグローバルな社会と私たち」（2017年）
・東京都三鷹市立小学校「日本とアフリカ―国際平和を考えてみよう―」（2017年）
・内閣府国際平和協力本部事務局南スーダン司令部要員派遣前研修講師（2016年）
・スーパーグローバルハイスクール（SGH)玉川学園グローバルキャリア講座講演会講師「平和への意思をつなぐ―国連平和維持活動（PKO）」（2015年）

10 人や国の不平等をなくそう

16 平和と公正をすべての人に

国際学部　准教授　松村 史紀（まつむら ふみのり）

国際学科

分　野　国際政治学、東アジア国際政治史

研究テーマ
・総力戦と冷戦の比較研究
・戦後東アジアにおける地域秩序の形成過程
・米中ソ関係

キーワード
東アジア国際政治
現代国際政治
現代中国政治外交

所属学会等　日本国際政治学会、アジア政経学会、グローバル・ガバナンス学会、北東アジア学会、現代中国研究会

特 記 事 項

URL:
Mail: f-matsu [at]cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: 028-649-5190
FAX: なし

研究概要

国際政治の歴史は愚行と悲劇に満ちあふれている。好戦的で権力闘争に長け、悪意をもった勢力が悲劇を引き起こすのであれば、国際政治学者でなくとも道理は説ける。ところが、正義や平和をかかげた人間が期待を裏切り、愚行と悲劇に終わることはめずらしくない。権力者の悪徳を責め、市民の善意を拡げるだけでは紛争の種はなくならない。あらゆる不公正を許さず正義を貫けば、それを快く思わない勢力と闘うことになるし、権力を築くことができれば、こんどは社会をすみずみまで厳しく管理する全体主義を招来しかねない。かけがえのない善意が大きな悲劇を生むということほど悲劇的なことはない。

国際政治の歴史を学ぶことは、悲劇を引き起こした犯人をさがし、論難することではなく、悲劇のなかにおかれた個人を深く理解することにほかならない。いまを生きる人間は現代の価値観に基づき、事態の結末を知っているという圧倒的に優位な立場から過去の愚行を嗤い、厳しく裁くことに慣れている。それを「歴史の教訓」だと自負すれば、悲劇にさいなまれた人間と対話する機会は生まれないだろうし、みずから現代の特権を享受しているという自覚さえめばえない。過去の歴史をくり返してはならないという痛切な標語には、どこか独善的な自負がつきまとう。

人間が切迫した状況のなか、限られた情報しか与えられず、限られた資源をもとに、既存の組織のなかで選択を迫られるという、それでいえば常識的な事実をひとつひとつ丹念につむぐようにして歴史の像を結ぶ、これが国際政治史を学ぶことであり、過去の人間と対話する、わずかな手がかりとなる。恐怖のもとにおかれた人間の本性が容易には変わらない（トゥキュディデス）のだとすれば、過去の人間と対話することは、いまと未来を生きるひとびとを深く理解するための一歩にはなるだろう。

教育・研究活動の紹介（特徴と強み等）

戦後東アジアを舞台に米中ソ日などの大国がどのような環境のもとで、どのような対外政策を選択してきたのかを学んでいる。残され、公開されている史料にできるだけ広く目を通すため、米中露日いずれの言語で書かれたものも読むようにしている。この四言語を相手に立ちまわっている研究者は日本に数名いるが、じつは世界のなかでもけっして多くはないと思われる。意外にも日本語の壁は厚い。

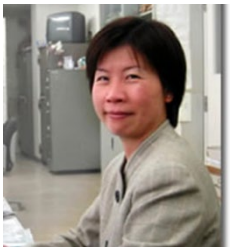
教育活動では講義、語学、演習をそれぞれ担当しているが、安易な「歴史の教訓」ではなく、国際政治史のなかに現れる人間を深く理解することをめざしている。そのため映画などを手がかりに思考を広げてもらうこともよくある。たとえば、黒澤明監督の映画『七人の侍』では弱者に同情をよせる善意の指導者が一部の村人を犠牲にしてまで村落を守り抜かねばならないという厳しい決断を迫られる。この決断は、国際政治の悲劇を考える難しさを教えてくれる。また宮崎駿監督の映画『紅の豚』では主人公である人間がなぜか豚のすがたをして暮らしている。窮極の堕落したすがたを選ぶことが自由への道だという、どこまでも倒錯した状況を目の当たりにすれば、総力戦という20世紀の怪物を理解する一助になるだろう。これも学生の興味と柔軟な思考を引き出したいという苦肉の策である。

今後の展望

歴史のなかから人間像を学ぼうとする意欲がなかなか学生にめばえない。無能な教師の不徳の致すところというほかない。教育の質向上の第一歩はやはり教員自身の勉学にあるということを痛感している。

国際学部　教授　マリー　ケオマノータム

国際学科



分　野　社会学（地域社会学）

研究テーマ
・タイの開発と地域社会
・タイの地域住民組織

キーワード　社会学（地域社会学）
タイの社会と文化
地域住民組織

所属学会等　日本社会学会、日本労働社会学会

特 記 事 項

URL:
Mail: malee@cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: 028-649−5173
FAX: 028-649−5173

研究概要

私の母国であるタイの首都バンコクおよび地方都市での地域調査を行っています。タイは日系企業の進出などにより工業化が進み、バンコクと農村の地域格差が拡大しています。そして農村では貧困、バンコクでは人口集中による都市問題が発生しています。農村出身者の多くはバンコクでスラムを形成し、劣悪な居住環境での生活を強いられています。そうした恵まれない条件におかれた人々が自分たちの生活を守り、改善していくために結成するのが地域住民組織です。私は、この実態調査をとおして、住民の権利と自治を保障する望ましい社会開発のあり方を考えています。

教育・研究活動の紹介（特徴と強み等）

私の卒論ゼミでは、海外調査を行う学生がほとんどです。文献研究、調査計画の立案、現地調査の実施、卒論の作成という一連の作業をとおして、社会調査の実践的な能力を養成することを目的のひとつとしてきました。1980年代後半以降、急激な工業化・都市化を経験し、大きく変容しつつあるタイの都市を対象とし、社会学の立場から、貧困、教育、ジェンダーなどの社会問題や地域社会の実態に関する調査を行う研究がおもなものです。海外調査にはさまざまな困難が待ち受けていますが、これを乗り越えていけるよう、全力でサポートしています。

タイ語関連科目では、タイ語による聞き取りやコミュニケーション能力を身につけることを目標として、短期集中訓練を行い、小人数グループでの訓練をとおして、日常生活の簡単な会話能力を養成しています。具体的には、タイ料理をともにつくることをとおして、タイの文化やタイ人の生活習慣、思考について話し合っています。その際、メニューの決定、材料の買い出し、料理、会食までをできる限りタイ語の会話で行うこととしています。

今後の展望

これまでどおり地道に研究に取り組むとともに、学生の関心と主体性を尊重した教育活動に努めたいと思います。

社会貢献等（社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等）

高校での出前講座をはじめ、依頼があれば、タイ語・タイ社会についての講座・講演などに対応しています。

国際学部　教授　吉田（よしだ） 一彦（かずひこ）

国際学科

分　野　一般言語学、教育学、言語学の哲学

研究テーマ
- 多言語コミュニケーション
- 外国語学習の方法（教え方ではなく学び方）と言語運用能力の獲得
- 機能語（文法的な働きをする単語）と人の認識・行動との関係
- 言語を対象とする科学的研究法

キーワード
- 多言語コミュニケーション

所属学会等
- 海外日本語教育学会、日本語教育学会、日本認知科学会、外国語教育学会

特 記 事 項

URL: https://www.facebook.com/multilingual.communication/
Mail: ysd[at]cc.utsunomiya-u.ac.jp
TEL: 028-649-5239
FAX: なし

研究概要

多言語コミュニケーション学として、１）世界各地の多言語社会に関するケーススタディ、２）相互理解を達成するための限られた外国語能力の有効活用法について、３）コードスイッチングにより達成されるより良い相互理解について、４）成功した外国語学習者の学習法と学習ストラテジーと多言語使用との関係について研究を進めている。

一般言語学分野では、機能語の機能研究 と文法学的方法の限界に関心を持ち、時間表現（テンス・アスペクト）と人による時間の認識との関係性について研究している。また、日本語やタイ語、ピダハン語など、多くを言葉にして言い表さない言語に高い関心を持っている。

外国語教育のための基礎研究として、対照言語研究や類型論（特に、音声・文法･意味･テクストに関して）と取り組んでいる。

また、研究は方法を絶えず再考しつつ進めるべきものと考えているので、科学哲学の各論としての言語学の哲学と海外日本語教育学の哲学とは常に取り組んでいる。

さらに、言語哲学、特に１）文化と言語との関係性の問題、２）人と言語との関係性の問題、３）言語に見られる〈規則〉と〈規則性〉の問題に強い関心を持っている。

教育・研究活動の紹介 （特徴と強み等）

自分自身、生まれてからの25年間日本語単一言語話者として過ごした後に外国語を意識的に学習し外国語によるコミュニケーション技術をゼロから構築していったこと、その過程で数多くのマルチリンガルたちと共同作業できたことや言語に関する専門的な分析能力を獲得したことなど、自身の経験を相対化・客観化してみたいということが、研究の最大の動機である。

自分自身が元留学生であり、留学生対象の授業と長い間関わってきていることから、留学生教育の面で力を発揮できると考えている。

今後の展望

１）多言語運用能力は多言語社会に生まれ落ちれば自然と身につくものではなく、「学問に王道なし」がもっとも適切にあてはまるような意識的努力によって獲得すべきものであること、２）多言語使用者であればあるほど人々の差異に寛容で多様性を受け入れられること、この２つを経験的に知っている。なぜそうなるのかを、学術的に解明していきたいと考えている。

社会貢献等 （社会活動　特許等取得状況　産学連携・技術移転の対応等）

国際協力機構（JICA）の国際ボランティア（日本語教育）関連の業務を受託している。そのことに加えて、日本語教師・英語教師および外国語学習の経験から、学習者の視点を重視した外国語教育のサポートができる。